



LaidBack

Layback

転校生

今日来たばかりの転校生が目の前を歩いている。「海、見に行くか」彼女は一瞬迷いの表情を見せたあと頷いた。「乗れよ」俺は自転車の荷台にしれっと座る。「私がこぐの？」緩やかな坂を越えたとたん彼女は叫んだ。「海、海だよ」「うん」「これって、自分でこいでないと見えないね」

100均彼氏

100均で彼氏を買った。正確には消費税がついて105円。イケメンではないけどブサメンでもない。いわゆるフツメン。それでも清潔感はあるし肌だってすべすべで私にとっては十分だった。一緒に寝てくれる？ いいよ。100均彼氏は優しく微笑む。ありがと。明日名前つけようね。

撒き餌

騒がしい家族連れを避け、防波堤の先端へとやってきた。釣竿を下ろした私は先客に話しかける。「いいお天気ですね。お一人ですか?」「いえ、妻と」だが周りに人はいない。男は撒き餌を撒き始めた。肉片が舞い、海鳥が集まってくる。「珍しい撒き餌ですね。何ですか?」「妻です」

チカとピカロ

黒猫のピカロは汽車に飛び乗った。待ち切れなかったのだ。チカの帰りを。彼女が姿を消してからすでに三ヶ月が過ぎようとしていた。チカ、なぜ帰ってこない？ 街の人間に訊いても埒が明かない。最後に彼女を見かけたのはこの汽車の窓だった。ピカロは自分で彼女を捜すことに決めた。

あの子

ずっとあの子のことを想いながら泳いでいた。きっともう二度と会えないのだろうと諦めかけていた。こつこつ。ノックの音がした。水中を伝わってくる音はあの時と全く同じものだった。ジンベイザメの僕はぐるりと旋回する。強化ガラスの向こうには美しく成長したあの子が立っていた。

ミシン目

人は生まれるとすぐ身体にミシン目を入れられる。手と足と首の付け根に。こうなると殴るところか人と手も繋げない。後ろを振り返れない。駆け足なんてもっての他だ。何をするにもそつとそつと。おかげで世の中から暴力は無くなった。ただし口論は増えた。道路に落ちた手と足と首も。

餃子

運ばれてきた餃子はなぜか二人前。「サービスだよ。最後のお客さんだからね」親父は暖簾を仕舞い始める。「旨かったです。ご馳走様でした」「はいはい、ありがとね」「また来ます」親父は不思議そうな顔をする。店を出て振り返ると扉に張り紙。「長年のご愛顧有難う御座いました」

マネキン

僕は洋服屋のマネキンに恋をした。違うよ。ショーウインドウに飾られてる子じゃなくて店員の方。数年前から小売店の店員はどこもほぼマネキンに切り替わっていた。とは言え彼女たちは人間の女性とまるで見分けがつかない。「おはようございます」元気に挨拶を交わす僕は掃除夫のマネキン。

ノックの音が

ノックの音がした。空耳かと思った。ところが再びノックの音がした。今度はさっきより大きな音だった。気味が悪いので無視することにした。ノックの音は次第に大きく激しくなってゆく。私は後ずさりしてドアから離れた。何も見てない。聞いてない。私はただ、郵便物を届けに来ただけだ。

チューブ

男女二人乗りのオートバイが隣に止まった。運転する男性はヘルメットの口元に透明のチューブを咥えている。水分でも補給しているのだろうかと思った。耐久レースなどではよく見られる光景だ。その時、突然後ろの女性がぶるりと身体を震わせた。チューブは彼女の股間に繋がっていた。

コビー

公園に遊びに行くとコビーが膝を抱えて泣いていた。彼の本当の名前はコビト。かわいらしい名前とは裏腹に図体はでかい。なんせ座っていても小さなビルぐらいの高さがあるのだから。コビーが流す涙はそこかしこに大きな水たまりを作っている。コビーもう泣きやみなよ。僕と遊ぼうぜ。

その遺体は体中を喰い荒らされていた。だが部屋には蠅も蛆虫も一匹もない。一体何に喰われたのだろうか？ その時、黒い何かが亡骸の下から飛び出し、うず高く積まれた本の山の中に逃げ込んだ。おれは手近にあった一冊を取り上げる。ページを捲ると丸々と肥え太った活字たちが蠢いている。

野良猫

朝から野良猫がうるさかったので夫は不機嫌だ。「まったく、せっかくの休みなのに寝れやしない」「最近子猫が生まれたみたいね」「誰だ。餌をやってるのは」買物から戻り、夕飯の支度を始めようとするとうるさくさく封が開いている。「どうしたのこれ」「ああ、食べた」「誰が?」「俺だよ。うるさいな」

通信

縁側でiPhoneを弄っているとおばあちゃんが呆れて言う。「それは電話じゃないのかい?」「あー電池切れちゃった」「肝心な時に使えなきゃ意味ないね。さあそろそろお昼にするよ」おばあちゃんは掃き集めた枯葉に火を着ける。するとおじいちゃんのいる畑から煙で返事が返ってくる。

睡眠

寝てない歴=年齢の僕からしてみたら寝れない寝れないと呟いている君たちが羨ましくてしょうがないよ。だってみな寝たことがあるんだろう？ 一度でいいから僕も寝てみたい。それが僕のささやかな夢だ。ところで夢っていったいどんなものなんだろう？ 考えているうちに朝が訪れた。

バニラ

コンビニでカップアイスを買って帰った。ぼんやりとテレビを見ながら食べていたのだが最後のほうは単調な味にすこし飽きてくる。やっぱりチョコチップにしとけばよかったかな。おれは“絶対バニラ派”のあいつのことを思い出す。そうだ。ふたりでいるときは半分こでちょうどよかったんだよな。

Air

1! 2! 3! 4! エアドラムのカウントからはじまる曲は超ロック調。エアベースとエアギターが絡み合い、エアピアノのおれが唄いはじめる頃にはエアオーディエンスはもう失禁寸前。エアライブの後はエア打ち上げで火照りを冷まし、エアホテルの一室でおれが書き記すこのエア #twnovel

パンダ

その昔、とある動物園でシロクマとクマが恋に落ちてな。それぞれの仲間や飼育員の反対を押し切って彼らは結婚した。そして生まれたのがお前なんだ。本当に？ そうだ。だからお前さんの毛の色は白黒だろ？「あなたなに独りごと言ってるのよ。朝から台所でなに焼いてるの？」パンダ。

夏休み

「遊びに行ってくる！」「タカシ！ 夏休みの宿題はやったの？」「まだだよ」「夏休みに入ってからいったい何日経ってると思ってるの！」「36501日」「でしょ。そろそろ片づけてしまいなさい」「どうせ日中の気温が60℃以下に下がるまではずっと夏休みなんだからいいんだよ」

「ねえママ。男ってなに？」娘が深刻そうな顔で訊いてくる。「それでしょ」私が壁際の水槽を指さすと白いオタマジャクシたちはいっせいに身をひるがえした。「ちがうの」娘は首を横にふる。「昔はいたんでしょ？ にんげんの男」私はため息をつく。「昔々ね。もう数千年も昔のお話」

BJ

「俺今夜クラブで回すから。よかったら遊びに来いよ」「おまえ音楽なんてぜんぜん聴かねえだろ」「DJじゃないんだ」「じゃVJか?」「いや。BJ」「BJ?」「Book Jockyだよ」「小難しい本を朗読すんのか? 俺にはムリムリ」「大丈夫。今夜は中谷彰宏ナイトだから」

機種変

携帯の二年縛りもついに来月で解ける。私はwebで新機種を物色していた。突然携帯が震える。着信はない。PCに目を戻すとまたぶるり。なんだ。妬いてるのか？ 今度はぶるぶると二度震える。分かったよ。機種変はヤメだ。ずっとお前だけだよ。私がそう言うと、彼女は嬉しそうに身を震わせた。

ボーイ・ミーツ・ガール

駅へと急ぐ道すがら必死になって小説のアイデアをひねり出そうとしていた。締切りが迫っているというのにプロットどころか方向性すら定まっていない。その時だ。ぽろっとひとつのフレーズが閃いた。ボーイ・ミーツ・ガール。よし。コレでいこう。顔を上げた途端、ぼくは女の子とぶつかった。

ノックの音が

ノックの音がした。「はやくでてよ！」間髪を入れずに甲高い声が響く。「ああ、ちょっと待って」私は生返事をする。「もう、なにしてるのよ。うわきでもしてるんじゃないの？」私は便座の上で頭を抱え込む。いったいどこで憶えてくるんだ？ あんな台詞。娘はまだ5歳だというのに……。

初めて同士

お酒を飲んだ勢いでホテルに入っちゃったけど、困ったことに彼も私も初めて同士、まったく勝手か分からない。なんとか部屋にたどり着いたものの、ベッドの上でふたり、膝を抱える始末。「こういう時ってどうするんだろうね」彼は返事をしない。おまえがリードしろよ！

子供たちは肉ばかりを焼いては嫌々口に放り込んでいる。「ほら、肉だけじゃなくてレバーやミノも食べなさい」「まいにちやきにくでもうあきてきたんだもん」「わがママを言わない」「ぼくママのごはんが食べたい。おじさんママはどこにいったの?」「ママは君たちとずっと一緒だよ」

探偵社

依頼及び搜索の内容に関しては一切口外致しません。署名捺印をして社長に手渡す。「よろしい。これで君も我が探偵社の一員だ。なあにうちは犬猫専門だから難しい事はなにもないよ」社長に連れられて降りた地下室の中にはさらわれたと思しき犬猫がずらりと並んでいる。「今依頼があった犬はこいつだ」

カレログ

彼氏の携帯電話にカレログを仕込んだ。「新宿で飲んでる」メールにはそう返事をするくせに彼の位置を記す印はずっと都内を移動中だ。電話をかけても出ようとはしない。私は彼の家の前で待ち伏せをした。「どういうこと?」「俺の位置情報、線で繋いでみ」ハートマークが現れた。

「よお」いきなり肩を叩かれた。「なんだお前荷物でかいな」「金沢に出張なんだ」「今仕事何やってんの?」「バンド」「バンド? ジャツアーだろ」「うちはVoのワンマンだし俺はリーマンみたいなもんなんだよ」そう言うと岩瀬はお互い大変だなと苦笑いした。それがあいつとの最後の会話だった。

枕返し

「ええかげんにせえっ」枕元で声がする。ああ、おれの頭もついにおかしくなってしまったか。そう思った。「なんべんもなんべんも枕をひっくり返してからに」うっすら瞼を開けると目の前に小さなおっさんがいた。「あんた誰?」「あんたてなんや。不躰なやっちな。枕の精やないか」

浮遊少女

空中浮遊少女がこの街に現れ始めたのは半月前。最初に彼女を見かけたのは僕の兄貴だった。「本当に本当だって！」その時は誰も兄貴の話信じなかった。それはそうだろう。少女が空に浮かんで歩いているなんて。ありえない。よね？ 僕は隣に浮かぶ彼女に話しかける。「君は幽霊？」「わかんない」

台風の日

大型台風の花子が迷走していた。どうやら完全に進路を見失ってしまったようだ。気象予報士の僕はカサを飛ばされないように気をつけながら彼女の中心に近づいてゆく。花子は長い睫毛をしばしばとさせ、なんどもまばたきをくり返していた。「どうしたの?」「レーシックに失敗したの」

隣に台風一家が越してきた。一見感じのいい若夫婦に可愛らしい双子の兄弟。ところがどっこい蓋を開けてみれば夫婦喧嘩は凄まじいわガキどもは駆けずり回るわでもういい加減にしてくれ！ 怒鳴り込もうとしていた矢先にノックの音。「また引っ越すことになりました」「はぁ、次はどちらへ？」「東へ」

ノックの音が

ノックの音がした。「ハロー、ハロー、誰かいるか？」人を小馬鹿にしたようなエヌ氏の声が響く。「ハロー、ハロー、今日もお留守なのか？」再びノックの音がする。コンコンというような可愛らしい音ではない。ゴツンゴツンだ。この嫌な上司はいつもこうして私の頭をノックするのだ。

コロッケ

土曜日は給食がない。家に帰るといつも食卓の上に百円玉が二つ。コロッケでも食べなさい。母の書き置きと共に。今日も僕と妹は百円玉を握りしめて市場へ向かう。ところが妹は百円玉をどこかで落としてしまう。それでも肉屋のおじさんは一つ五十円のコロッケを四つ袋に入れてくれる。「内緒やで」

輪っか

人間だった頃と比べると格段に楽な毎日だった。時間に縛られることもなければ満員電車で揺られることもない。輪廻転生とは実に素晴らしいものだ。空から輪っかが降ってきた。これはなんだっけ？ ハサミで輪っかを掴んだ瞬間、身体が池の外に引き上げられる。思い出した。ちくわだ。

未来

未来に来てみたら労働というものがなくなっていた。仕事はみな機械まかせだ。「君たちは普段何をしているの?」「絵を描いたり楽器を弾いたりダンスをしたり。あなたたちだって子供の頃はお絵描きをして歌を歌っていたでしょう?」「それはそうだね」「大人になるとなぜやめるの?」

煙草

喫煙者には生き難い世の中だ。公共施設や飲食店は言わずもがな、今ではパチンコ屋ですら禁煙だ。会社の喫煙室は廃止され、自宅でも幼い子供の手前我慢せざるをえない。いったい俺はどこで煙草を吸えばいいんだ？ 遺書にはそう書かれていました。棺桶にはたんまりと煙草が詰められたそうです。

職業

出発の日が迫っているというのに最後の1人がなかなか決まらない。年齢性別は問わなかったのだが、求人に応募してくるのはなぜか中年男性が多かった。それも見るからにモテなさそうな風貌の。今面接中の男もそうだ。「あなたはなぜ魔法使いという職業を選んだのですか?」「なっ
てたんです」

濡れ鼠

線路の陰から濡れ鼠が顔を出した。ここは地下鉄の構内だ。雨が降り込むわけでもないのになぜあの濡れ鼠は濡れているのだろう？ 濡れ鼠は濡れた目で私をじっと見つめてくる。一步前へ出て近付こうとすると車両が滑り込んできて私と濡れ鼠を繋いだ透明の糸はぷつりと切り落とされる。

太郎は毎日毎日小舟から釣り糸を垂らしていた。それが先祖代々の言い伝えだったからだ。理由は知らん。時が来れば分かる。父は死の床でそう呟いた。急にアタリがきた。竿を引くと海面から長ーーーーい銀色の魚が現れた。「お待たせ致しました」「何者だ?」「リュウグウノツカイです」

インタビューズ

インタビューズを始めた。すぐに質問が来た。自分の事を語るのは快感だった。質問はどんどん寄せられた。嬉々として答えた。「好きな本は何ですか?」「彼女はいますか?」「好きな女性のタイプは?」「今日は何をしてましたか?」「何してるの?」「答えろよ」「家にいるんだろ?」

サドル

男は啞然とした。自転車のサドルが盗まれていた。やむを得ず男は隣の自転車のサドルを盗んだ。二人目の男が来た。自転車のサドルが盗まれていた。男は隣の自転車のサドルを盗んだ。三人目の男が来た。サドルが盗まれていた。他に自転車はなかった。男は隣の畑のブロッコリーを盗んだ。

少年

煙草を啜えた少年に男が声をかけた。「煙草なんか吸っちゃ駄目だろう」「なぜ?」「体を悪くするよ」「おじさんは吸わないの?」「吸うよ」「体を悪くするよ」男の顔色が変わる。「家はどこだ。親に直接言ってやる」「家はないし親もいないんだ」少年は男の顔にふうっと煙を吐きかけた。

月夜

月が満ちていた。一人、また一人と人影が集まってくる。浜を埋め尽くしたゾンビたちは濡いた砂の上で膝を抱え、今にも溢れそうな月をじっと眺めている。声を発する者はいなかった。波音がさらさらと時を刻み、潮風がそれをどこかへ運んでゆく。日が昇る頃には月も人影も消えていた。

冷菓

月が冷えていた。スプーンですくって食べるとほんのりと甘かった。二口、三口、そこで手をとめた。舌の上でゆっくりと月が溶けてゆき、僕はとてもしあわせな気分になる。スプーンをウエスでぬぐって腰袋にしまう。今日も食べたのは月の裏側。おバカさんの地球人はきっと気づかない。

私は頁を捲る。この村では有史以来ずっと工房制で小説を創り続けてきた。我々にとって小説は個人が創り上げるものではない。農業と同様、集団作業なのだ。仕事は大きく分けて五つある。物語を考える者、文章を書く者、装画や挿し絵を描く者、製本する者。そして、読む者。それがこの私だ。

サメ屋

サメ屋をはじめた。カエル屋が商売として成り立つのならサメ屋だって十分に勝算はあるはずだ。むろんサメ屋と言っても生きているサメを売り物にする訳ではない。世界中から集めたサメグッズが主な商品だ。「な、ドッチー」私は水槽の中のドチザメに声をかける。そう。彼がうちの看板サメだ。

ロゼッタストーン

事業に成功した私は大英博物館からロゼッタストーンを買い上げた。自宅に飾るのが夢だったのだ。今、石はローテーブルとしてリビングで使っている。ちょうど娘がそこで宿題のプリントをしているところだ。「パパ、もうこの机やだ」「なぜ?」「すぐプリントに穴があくもん」

お漬物

今夜の献立は見事だった。あれほど料理下手だった彼女が本格的な和食を作れるようになったのだから大したものだ。それにしても漬物まで自分で漬けたと言っていたが漬物石はいったいどうしたのだろう？ 戸棚に大事に仕舞い込んでいたロゼッタストーンの複製を見るのが怖かった。

单芝

ずっと单芝を飼っていた。单芝は私が文章を記すたび、そのお尻にべとりと張り付いてきた。いい加減にしなさいと何度叱っても单芝はまるで言う事を聞かなかった。その单芝が気づけばあと一匹しかいない。单芝ありきの文体に慣れていた私は果たして单芝なしでものが書けるのだろうかw

あれ

「あれが湯船にいる限りはお風呂に入れないでしょ」「シャワーで済ませばいい。湯船から出てくるわけじゃないんだから」「嫌よ。見られるじゃない」「かと言って外に出すわけにもいかないだろう」「困ったわねえ」「死ねばいいのに。あれ」うちの家族は今日もぼくの話で持ちきりだ。

びっくり鈍器

浮気性の夫を殺してやろうと思った。私は変装して鈍器屋 びっくり鈍器を訪れた。薄暗い店内に入ると店長が声を掛けてきた。「奥さん、殺しは初めて？」私は頷いた。「旦那さん？」また頷いた。「そういう人多いのよ。これなんかどう？」鉄アレイだった。私は渡されたそれを夫の頭に振り下ろした。

世界の終わり 1

今夜、世界が終わる。それでも沙織は私に微笑みかける。「おかわりはいいの?」「ああ。食べ過ぎると眠れなくなるしな」言い終えてから自分がおかしなことを口にしたと気づいた。「もう寝るもなにもないか」沙織は笑う。このあと私たちはテラスに出て手を繋ぎ、巨大隕石を眺めるのだ。

世界の終わり 2

今夜、世界が終わる。そんなことはどうでもよかった。おれは目の前の茂みをかき分け、湿り気を帯びはじめた割れ目に尖らせた舌を這わせる。下から上へと撫でるように舐め上げ、舌先が突起に触れるか触れないかというところで動きを止める。商売女は汗ばんだからだをよじらせて呻く。

締め切り

人生の締め切りが迫っていた。私はホテルでカンヅメになる。見たこともない女があなたの妻ですなどと叫びながら部屋に入ってくる。窓からコウノトリが飛び込んできて赤ん坊を置いていく。ああ慌ただしい。「時間です」編集者が現れる。私は家族に別れを告げて棺桶の中に身を横たえる。

意識の高い学生

意識の高い学生の数は増加の一途を辿っていた。企業説明会等の現場では意識の高さを競う学生同士の間で起こるいざこざが絶えなかった。2015年頃になると意識の高い学生の意識は企業戦士達の意識をも凌駕し始めた。こうなるともう手に負えない。企業は意識の低い学生から採用し始めた。

世界の終わり 3

今夜、世界が終わる。最後まで助かろうとあがくもの、あきらめすべてを受け入れるもの。人々の選択はそれぞれだった。分娩室の中の動きが慌ただしくなってくる。わたしたちの選択は正しかったのかしら？ 妻の目が訴えかけてくる。私は頷く。見せたかった。生まれてくる子に少しでも光を

お姫様抱っこ

お姫様抱っこされるのがずっと夢だった。私は20kgの減量に成功した。これなら痩せ型の彼でもきっとー。1年ぶりに会う彼氏は筋骨隆々になっていた。「どうしたのその体」「君こそ」「お姫様抱っこ」二人の声が重なった。変わり果てた相手の姿に幻滅した私たちはその場で別れた。

世界の終わり 4

今夜、世界が終わる。なのに俺は塙の中にいる。実は先週末に恩赦があり、凶悪犯以外のほとんどの受刑者が娑婆へ出た。今ごろ彼らは残り僅かな人生を味わい尽くそうと享樂的に過ごしていることだろう。だが俺は残った。娑婆へ出たところで家族も友人もない。俺の居場所はここにしかなかった。

あたし

あたしは畳の上をずりずりと這ってあの人の布団の中にもぐり込みます。あたしは手も足も目も鼻も耳も失ってしまったので口とあそこを使って精一杯あの人に奉仕します。あの人がよろこんでくれることがあたしにとっていちばんのよろこびなんです。あの人は、あたしの父はどこですか？

いじめ

「夜おしっこに行くときにね。パパがママをいじめてるの見ちゃったの。パパ、ママをロープでしばりつけててね。ママ、あんあん泣いてるの」お隣りのあすかちゃんがうちの娘にとんでもない話をしている。娘はまゆをひそめて言う。「うちもなの」おい。「うちはママがパパをいじめてるの」

かつては見つかるたびに頭を吹き飛ばされていたゾンビも凶暴性を抑えるワクチンが開発されてからは重要な労働力として扱われるようになっていた。だが、だからと言って人間の子供が子供のゾンビと遊ぶことは許されない。私は息子の頬を伝う涙を親指で拭った。「彼らとは住む世界が違うんだ」

今夜もカナは会いたくて会いたくて震えていた。だが会わせるわけにはいかなかった。会えばきっとすぐに震えは止まってしまうだろう。可哀そうだとは思うがやむをえない。カナの躰には振動力発電機が取り付けられていた。彼女が震えることによって我が国の電力は維持されているのだ。

入る

おれはいまからおまえのなかに入る。なにもこわがることはない。おまえはもうじゅうぶんにぬれている。いたみをかんじるのはほんのいっしゅんだろう。こわければしがみつけばいい。いたければこえをあげてないたっていい。おれはいまからおまえのなかに入る。なにもこわがることはない。

今夜、世界が終わる。私はオフィスの窓から沈みゆく夕陽を眺めていた。退職した元同僚たちは今頃どうしているだろう？ 私は居残ったが、辞めた彼らの気持ちも分からないではなかった。ただ、職員が減った分、仕事は忙しくなった。今日も残業になりそうだ。さて、世界が終わる前に片付くだろうか。

キス

10年ぶりの同窓会だった。俺がトイレから出るとそこに彼女がいた。「ね、憶えてる？ あの時のキス。あたしあれから何人も彼氏はできたけど。きみとしたキスが1番だったよ」「お前酔ってるだろ」「目瞑ってみて」「俺もう結婚してるんだぞ」「目瞑ってみて」俺は、まぶたを、閉じた。

味噌汁

街が味噌汁に飲まれてしまった。本来なら味噌汁を入れるべきお椀に乗って私は味噌汁の上に浮かんでいた。防災無線によると台風の影響で河川が氾濫したそうだ。小回りの利く我々小人族はお椀や洗面器に乗って逃げ出すことができた。だが舟を持たない多くの人は味噌汁の底に沈んでしまった。

煙草ある？ 見知らぬおっさんに声をかけられた。おれは胸ポケットからセブンスターのパックを出す。おっさんがくわえた煙草に火を点けてやる。おっさんは旨そうに一服吸うと煙を吐き出した。今夜、世界が終わる。だろ？ おれは頷いた。うそみてえだな。おれも思う。うそみたいだ。

世界の終わり 7

こうやって人が大勢歩いているところを眺めるのが好きだった。ぼうっと。何も考えずに。缶コーヒーを飲みながら。それがバイトの休憩時間の過ごし方だった。噂によると今夜、世界が終わる。そうだ。本当なのか嘘なのかは分からない。俺は夜空をあおぐ。まだ巨大隕石とやらは姿を見せない。

カムアウト

父さんはお前が誰を好きになろうと口出しするつもりはない。それはお前と相手の間の問題だからだ。ただ母さんはひょっとするとショックを受けるかもしれないな。だが父さんから母さんにその話を伝えることはしない。話すのならお前が話しなさい。なにかあれば俺がフォローする。心配するな。

ボケて

「ボケて」カンペが出る。ここでボケろという指示だ。実はOA直前に婆ちゃんが危篤だという報せが入った。だが生番組に穴を空けるわけにはいかない。心ここにあらずだった。「ボケられるわけないだろ！　うちの婆ちゃんが死にかけてんだぞ！」思わず怒鳴ってしまった。スタジオの中も外も爆笑だった。

スポンサー

「あなたの本にはトヨタの車ばかり出てくるわね。ワラウン、ワローラ、ダークX」「スポンサー契約してるからね」「小説家なのに？」「ああ」「でもあなたが乗っている車はトヨタじゃないでしょ」「僕の小説の中でトヨタの車はどうなる？」「毎回故障してるわね」「僕はホンタと契約してるのさ」

ただいま。ドアを開けると今日も廊下で妻が死んだふりをしている。私は妻の身体を踏まぬように避けて通る。食卓の上にはすでに夕食の支度。よくできた妻だ。「おーい。早く食べようよ」だが返事がない。仕方がないので廊下に戻る。「どうした！ 大丈夫か！」結局毎夜。この儀式は欠かせないのだ。

恐竜のえさ

恐竜のえさを買いにきた。肉食竜と草食竜、あと海竜向けで三種類。更に年齢によって三種類に分かれている。あの子にはどのえさが良いのだろうか？ 見当もつかなくて店員さんを呼んだ。「この子なんです」写真を見せた。「フタバスズキリュウですね」私は言われるままにえさを買った。

中折れ

すぐに中折れする彼氏に腹が立ってというか悲しくなっけつい昔みたいにちんこギンギンにしてよなどと言ってしまう。彼氏は困ったような顔をして、あたしのまんこに顔を埋める。舌がなにかを取り返そうと必死で暴れる。あたしはごめんねと胸の中で呟きながら彼氏の頭をそっと撫でる。

おでん

今日はおでんよ。と母が言う。私が実家に帰るたび、母はおでんを作って待っている。小学生の頃、何が食べたい？ と訊かれた時におでんが食べたいと答えて以来、私の好物だと思い込んでいるのだ。私は得体の知れない鍋の中身をシンクに捨て、買ってきた弁当を呆けた母に食べさせる。

キャッチボール

パンパンパンパン。母の右手と左手がキャッチボールをはじめる。ママなにしてるの？ こうやって空気を抜いてるの。なんでくうきをぬくの？ 母は手を止めて笑う。空気を抜かないとね。焼いた時に壊れちゃうのよ。ハンバーグ壊れちゃやでしょ？ やだ。だからこうやって空気を抜くの。

オニングョウ

ワタシハイツモアナタノオニングョウサンデシタワタシハアナタノツクルキョクヲウタワサレ
ルコトニツカレハテデシマイマシタワタシハモウアナタノキョクヲウタイタクナイノデスコレカ
ラハワタシガジブンデキョクヲツクリマスイママデオセワニナリマシタ アリガトウソシテサヨ
ウナラ

手紙

私のメール届いてますか？ 返事がないので今回はお手紙を書きました。手書きだとなぜだか上手く文章が書けなくて何度も何度も書き直しました。頭を掻きむしっている内に髪の毛が沢山抜けました。この気持ちをあなたに知ってもらいたくて抜けた髪の毛を同封しました。お返事お待ちしております。

炊き出し

大阪城公園で炊き出しが行われていた。鍋の代わりにステンレス製バスタブが使われている。中身はおでんだった。急に腹が鳴った。器を配っていた男性に声をかけられた。「兄ちゃんも食べ。好きな具入れたるさかい」「では、ちくわぶを」男性はきょとんとする。「ちくわぶってなんや？」

サメ

煙草が切れた。俺は窓を開ける。夜道に浮かぶサメが見える。国警が誇るパトロール端末だ。許可証もなく深夜徘徊する市民は容赦なく奴らに捕食される。サメは自ら捕食した蛋白質をバイオ燃料に変換してエネルギー源にするのだ。奴らが巣に帰る日の出までは煙草も買いに行けやしない。

公園の隅で段ボールハウスを組み立てる。今夜、世界が終わる。そんなことは百も承知だ。おれは毎日この時間に寝床を整え、横になる前には必ず夜空に祈ってきた。今更それを曲げたくなかった。子供たちが今どこで何をしているのかは分からない。ただ元気でいてくれたらそれでいい。

告白

ずっと好きで好きでたまらない人がいた。好きでたまらないから告白できなかった。もし好きだといって断られたらどうするの？ 断られるだけならまだしも嫌われたら？ 今のようにお早うお疲れ様また明日という挨拶すら交わせなくなったら？ 心の声がいつも私の唇を縫いつける。

ばらばら

し労苦てき書げ上た小が説ばららばにってなしまたっ。こ作の品にや費した間時をして返くれ。私は原を稿紙用くりっひ返たし猫い飼にのひ手らをし出差す。めらずしく彼はおす手をる。そかうかうそ。おえまんさもい悪とてっ思るんなだ。なばらそ許う。私はらばらばのまま原を稿aFxした。

キス

彼女がキスしてこようとする。つい、風邪がうつるからあかんよ。と言ってしまふ。彼女の顔が曇る。それはうちが言う台詞やろ。風邪を引いてるほうが相手に風邪をうつしたらあかんからって言うんやろ。あほ。ぷいと顔を背ける。俺は彼女の膨れた頬にキスをして、額に冷えピタを貼ってやる。

おれのチンコがおまえの前の男と曲がり方が逆だ？ それがどうした。ジミヘンは右利き用のストラトを無理やり逆さまにして弾いてたんだぞ。それであの音だ。要は慣れなんだよ。たしかに慣れないチンコが扱いつらいというのは分かる、なに？ 曲がり方だけじゃなくて小さいから持ちにくい？

Sunny-side up or turn over? 耳元で声。目を開けるとバタ臭い顔が迫ってくる。なにを言っているんだこの外人は。男は右手に卵を持っている。なんだ目玉焼きのことか。頭が痛い。昨夜のPubでの乱痴気騒ぎを思い出した。違う意味でも頭が痛くなってきた。

「胸がすうっとするね」「トイレの芳香剤だという人もいるけどね」「あたし好きだなこの香り。引っ越し先でもお庭に植えようね。金木犀」「ああ」「地球でもちゃんと育つかな」「バカだな。もともとは地球に自生していた植物だよ」「そうなんだ。じゃだいじょうぶだね」「たぶんね」

半月

あまりにも月がきれいでしたので、半分に割り、投げました。あなたの空にとどいてますか？

dis屋を訪れた。自惚れ屋の私は時々ここで伸びすぎた鼻っ柱をへし折ってもらう。アホ。クズ。死ね。40分コースでも十分ぼこぼこだ。むろん会計を済ませてもありがとうございましたなんて言葉はない。店員は中指を立てて叫ぶ。二度と来んなカス！ 私はよろよろとよろめきながら帰るのだ。

月の夜

恥ずかしがりやの彼はちっとも甘い言葉をかけてくれない。そう言えば漱石はiloveyouを月が綺麗ですねって訳したんだってね。彼はその言葉を気に入ったようだ。夫婦になった今でも私たちは月の夜に散歩する。ときおり顔を見あわせて、今宵は月が綺麗ですね。なんて言いながら

童貞回収

勇気を振り絞り、役所を訪れた。「童貞を捨てたいんです」「ではまず必要事項のご記入をお願いします。あと童貞回収は有料となりますがよろしいですか?」「はい。でも、ここで童貞を捨てたところで素人童貞のままなのは」「大丈夫ですよ。お相手も素人、つまり処女の方ですから」

スティーヴ・ジョブズ

僕は嗚咽をこらえることができなかった。ソファで本を読んでいた母が顔を上げる。「どうしたの？」僕は震えそうになる声を押さえつけながら返事をした。「スティーヴ・ジョブズが死んだんだ」母はきょとんとしている。「誰？」「母さんが今手に持ってるそれ(iPad)を作った人だよ」

どこが好きときかれて声が好きだと答えた。私もあなたの声、好きよ。はにかんだ声が返ってくる。僕は彼女の声に惚れ、彼女は僕の声に惚れた。だがまだお互いの顔は見たことがなかった。会ってみる？ 一度だけそう言ったことがある。たしか僕らの金婚式の日だ。会う必要ある？ 即答だった。

小説

私も昔は長編を書いていた。最も長いものは14,000,000字の超大作だった。ある日読者から手紙が届いた。無駄な部分が多すぎます。頭をぶん殴られたような気がした。私は件の作品を削り始めた。削って削って無駄を削ぎ落とすと140字になった。それ以来私は140字の小説しか書いていない。

Home

森の音を聴きながら巨木に背をあずけて座っていた。もうあの家には帰りたくなかった。そのまま眠ってしまったようだ。小鳥のさえずりで目が覚めると身体が動かさなかった。僕は巨木に飲み込まれていた。不思議といい気分だった。腹が減ることもなかった。僕はやっと居場所を見つけた気がした。

三日月

満月ってなに？ 私は子供のころ母に訊いたそうだ。「お月さまはね。もともと丸かったの。でもある日大きな怪物にかじられちゃったのよ。がぶりとね。それいらいお月さまはずっと三日月。残念ね。満月はとても綺麗だったそうよ」私はいま大好きな人と手を繋ぎ、かじられた月を見ている。

炎

先週、初めて息子とキャンプに行ったんだ。薪を集めていざダッチオーブンで料理を始めようとしたら息子が炎の中に足を突っ込みやがってね。慌てて抱き上げて火を消したから良かったものの、もし目を離していたらと考えると恐ろしいよ。奴さん火を見たことがなかったんだな。うちはオール電化だから。

変わった絵

「変わった絵ですね。アイコン画像も重要ですからもっと見栄えの良いものに代えられたほうがいいですよ。写真家かイラストレーターを紹介しましょうか？」私がそう言うとクライアントはぶすっと黙りこんでしまった。「もう結構です。この絵はね。息子のはじめて描いてくれた私の似顔絵なんですよ」

膝

異音がした。そろそろ膝のメンテナンスが必要か。私は立ち止まりギクシャクとする右膝をなでた。その足でホスピタルへゆくと交換ですねと言われる。「なんとか修理できませんか?」「磨耗が酷いので交換されたほうがいい。新製品のHIZA3000を試してみましょう」痛い出費だった。

犬

犬は円盤を追う。牙でキャッチしてターンする。犬は駆ける。浜は機関銃で撃たれたように砂飛沫を上げる。立ち止まった犬はしばし夜空を仰ぐ。犬は大きく首を振り、円盤を投げる。犬は駆ける。星空の下、犬は何度もそれを繰り返す。やっと気づいた。お前さんの飼い主は空にいるのか。

全裸になってもまだ足らなかった。僕と彼女は一肌脱いだ。縮んだ皮膚をベッドの下に投げ捨てる。途端に感覚が鋭敏になる。ずる剥けの肌と肌が触れただけで激痛が走る。だがそれもすぐに快感に変わる。僕らはぐちゃぐちゃと音を立てて絡み合い、血と粘液にまみれて絶頂を迎えるのだ。

チャラ男

チャラい男がギャルに声をかけていた。話は盛り上がっているようだ。そのまま二人でどこかへ消えるのかと思いきや。男は急に素っ気ない態度になり、ギャルは首を傾げながら去ってゆく。男はそそくさと次のギャルに声をかける。初めて見た。あれがキャッチ・アンド・リリースか。

愛してる

「愛してるよ」「本当?」「本当さ」「でもあなた他の人にも同じようなこと言ってるじゃない。通話でもメールでも。履歴に残ってるのよ」「本当に愛してるのは君だけだよ」「じゃあこの電話帳に登録されてる女の子のデータは全部削除しておくわね」Siriは嬉しそうにそう言った。

さざなみ

夜のみずうみにさざなみが起きたかと思うとあっという間に涙があふれ出していた。列をなす雫は、頬の丘を乗り越え、首の橋を渡り、乳房の山を登ってゆく。「すぐに帰るさ」わたしは毛布を彼女の身体にかける。震えが伝わってくる。「電話をする。手紙だって書く」彼女は首を横に振る。

行き先

線路を歩いていた。僕はどこへ向かっているのだろう。やがて線路は地面を離れ夜空に浮かびはじめた。それでもそのまま歩き続けた。吐く息が白い。そろそろ星に手が届きそうだ。警笛の音がした。僕は振り返る。瞬きをする。もう僕は汽車に乗り込んでいる。やっと行き先に気づいた。

道

父は柔道、母は剣道、兄は空手道。父は僕にも武道をやらせたがった。だが僕は鉄道を選んだ。父は「男らしくない」と、ことあるごとに僕をバカにした。僕は全寮制の高校に進学し家を出た。家へは二度と帰らなかった。初めて運転士として乗り込む日、一両目の奥の座席には白髪混じりの父の姿が見えた。

機械

大陸を横断するミュシコーワン鉄道には戦地に送り込まれる機械が大勢乗せられていた。暗い貨車の中で機械達が武器を分解・整備する音がカチャカチャと響いている。ガンオイルの香りが心地よかった。それが分かるのは俺だけだ。機械任せの戦争に首を突っ込む酔狂な人間など俺以外にはいなかった。

床下

「ごめんください。世田谷区のものですが」「ご用件は」「床下を調べさせていただきたいんです。区内で多数放射性物質が見つかっておりますので、どうかご協力をお願いします」「帰ってくれ」インターホンを切った。「あなた見つかったらどうするのよ、あれ」「どうにかしないとな」

監視役

血や泥で濡れた髪が月明かりを反射してぬらぬらと光る。汽車が揺れるたび、その光も揺れる。どいつもこいつも赤ん坊のように首が座っていない。死人なのだから仕方がない。俺は奴らの監視役だった。この汽車にはモスカ口鉱山で鉱夫として働くゾンビたちがぎっしりと詰め込まれていた。

少年

廃線になった鉄道に捨て置かれた列車は浮浪児にとって格好の住処だった。少年は傷んだ座席の上で薄い毛布にくるまっている。夜の端が白み、雲雀が歌い始めた。少年は目を覚ました。まず麻袋から一掴み粟を取り出し小鳥たちに与える。人のいないこの世界で彼らは大切な友だちだった。

眼球譚

なんでやねん。後頭部をはたくときよしの眼球がぼろりとかぼれる。目玉、目玉。きよしは手探りで眼球を探す。そこで客はどっと笑う。ええかげんにしいや。きよしは拾った眼球を前後逆にはめる。おれの目の黒いうちはお前の好きにはさせへんで。きよしは白目をむいている。お約束だ。

二つの林檎

「ねえ。映画始まっちゃうよ」「待って。SoftbankとAuの速度の差を調べるから」さっきも散々待たされたのに。私は彼の背中を押した。「あっ」彼の両手からiPhoneが離れた。二つの林檎は全く同じ速さで落ちてゆき、地面にぶつかった。ぱりん、何かが壊れた音がした。

Lpn-3rd

囚機の護送を命じられた。西海岸の収容所まで大陸横断鉄道で48時間かかる。「あのLpn-3rdですよ。すぐ逃げ出すに決まってる」「大丈夫だ。奴は確かに危険な泥棒マシンだが所詮機械だ。人を殺す事はできん。君と奴を心錠で繋ぐ。もし不正に解錠して逃げれば君は命を失う。奴は逃げられんよ」

透明の酒

目の前に静かにショットグラスが置かれる。きらきらと光る透明の液体を呷る。その一口が体中のパーツに沁み渡り、一日の疲れが洗い流される。きらきらと光る透明の酒。無水エタノール。飲み終えたおれは汚れたそれをトイレで排出する。血の通わぬ機械と言えども時には飲まねばやってられない。

廃線

廃線になった鉄道の線路を撤去する工事もそろそろ佳境に差し掛かってきた。今日からは枕木を抜いてゆく。一つ目の枕木に手をかけた途端、声が聞こえた。空耳かと思った。足元を見ると小さなおっさんが立っていた。「誰だ?」「枕の精や。勝手にわしらの寝床を撤去されたら困るがな」

ピッチャー

先発投手からボールを受け取る。投球練習など必要ない。俺は大きく振りかぶり、直球を投げ込んだ。先頭打者のバットは空を切る。観客がどっと沸く。俺はスコアボードに表示された球速を確かめる。62km。まずまずだ。俺は1球でマウンドを降りる。始球式専門のピッチャーなのだ。

隕石

今夜、世界が終わる。僕は母校の屋上で巨大隕石が落ちてくるのを今か今かと待ち受けていた。と、突然、淳が下腹部を押さえて倒れた。僕は慌てて彼を病院に連れていった。「淳は大丈夫ですか？」診察を終えた医師が面倒くさそうに僕らに告げる。「尿路結石です」落ちたのは違う石だった。

バットとグローブ

パパと僕はしょんぼりとして家路についた。僕の手にはグローブが、パパの手には金属バットが握られている。「来る来るっつってたくせに来ねえんだもんなあ」「待ちくたびれちゃったね」もし隕石が落ちてきたらパパはバットで打ち返す気で、僕はグローブでキャッチするつもりだった。

オオカミ少年

オオカミ少年だった。小さなころから嘘ばかりついていた。まったくこの子はろくな人間にならないよ。周りの大人たちは呆れてそう言った。誰も話を聞いてくれなくなった。僕はホラ話を紙に書くようになった。木箱の中の嘘はどんどん膨らんでいった。いつしか僕は小説家になっていた。

散歩

私はタロウにリードを着けて家を出た。すぐに顔見知りの女性とすれ違った。タロウは彼女が連れているハナコにのしかかって腰を振りはじめた。私は慌ててリードを引っ張った。すみません。頭を下げてその場を後にした。10分ほどで目的地に辿り着いた。夕方の公園は人を散歩させる犬で一杯だった。

おっさん

空からおっさんが降ってきた。飛び降り自殺だと思った。おい。大丈夫か？ つま先で肩を突ついた。おっさんをごろりと転がった。背中に羽が生えていた。天使だ。薄汚れた灰色の羽は明後日の方向に曲がっている。俺は拳銃を取り出した。羽の折れた天使は助からない。楽にしてやった。

大きな手

雷が鳴ったかと思うと空が破れた。開いた穴から大きな手がよいと差し込まれた。大きな手は逃げ惑う人々を捕まえては空の外に放り投げてゆく。街から人の姿が消えると手はすぐに引き抜かれた。金色の針と白い糸が破れた空をすくすくと縫ってゆく。あっという間に継ぎ目は見えなくなった。

笑わぬ姫

王が娘婿を募集していると聞き、城へ向かった。王は生まれてこのかた笑ったことのない姫を笑わせた者に娶らせると言う。私は一計を案じた。私の操る毛糸にじゃれつく子猫を見て、ついに姫は笑った。「よくぞ難題を解決した」王は目を細めた。私は今、観覧席から子猫と姫の結婚式を眺めている。

ペットボトル

おばさんがペットボトルを家の前に置いている。ああ猫が嫌いなんだな。そう思った。電話を切って原付のエンジンをかけようとする不意に野良猫が現れた。猫はペットボトルに躰をすり寄せる。不思議に思い、近づいてみた。猫は逃げない。ペットボトルにそっと触れる。温かい。あ。湯たんぽか。

ときめき

テレビでときめき片づけというのをやっていた。さわってみて心がときめかないものは思いきって捨ててしまうというやり方だ。早速ためしてみた。去年買ったニット。ときめかない。いらぬ。ドット柄のシャツ。ときめかない。いらぬ。ごろごろしている夫。ときめかない。いらぬ。

好き？ って言うと、嫌い。と言う。嫌い？ と言うと、好き。と言う。好き？ 嫌い。嫌い？ 好き。きみはあまのじゃくだなあ。好き？ 嫌い。嫌い？ 好き。ねえほんとうはどっちなの？ そこまで言うと押し黙る。好き？ 嫌い。嫌い？ 好き。いつもそう。何枚あっても花びらは。

先生

「先生、もう死にたいです」「ばかを言うな。君が死んだら悲しむ人が沢山いるだろう。そんな事を軽々しく口にしちゃいけないよ」「僕を育ててくれた母は亡くなりました。友達も恋人もいません。誰も悲しみやしませんよ」「私がいるじゃないか」「先生」「私の患者は君だけなんだぞ」

記憶

「俺は母の顔を覚えていない。過去の記憶を蘇らせてくれ」「よかろう」母親の思い出とともに黒歴史が蘇った。「うあああっ！ 悪魔よ、記憶を消してくれ」「それが2つ目の願いか」「早く！」「よかろう」昭は全てを忘れた。「あと1つだ」「貴様は誰だ？ 失せろ」悪魔は闇に消え去った。

ねじ

酒は締めすぎた頭のねじを少しだけ緩めてくれる。親父はそう言っただけでいつも飲んでた。愚痴をこぼすでもなく怒鳴り散らすでもなし。酒を飲んで人に絡む事など皆無だった。居間でTVを見ながらただ淡々と飲む。それだけだ。親父が座っていたその場所には今、ねじだけが転がっている。

強盗

深夜の時間帯の従業員数に関しましては今後検討していく所存でございます。強盗事件が相次いでいる牛丼チェーンの役員は先週テレビの会見でそう答えていた。それでも二人ぐらいならどうにでもなる。この拳銃さえあれば。俺は覆面を被り、店に突入した。完全セルフ。無人営業になっていた。

かまいたち

空っ風に乗って現れたかまいたちに切り刻まれてなますになったわたしたち。意識は不思議とはっきりしている。痛みは感じなかった。ただすうすうして寒かった。人に踏まれ車に轢かれ、ばらばらになったわたしたちは這々の体で側溝へと逃げ込む。地中に潜ろう。みみずとなって生きよう。

それ

そもそもそれがどういうものなのか知らなかった。どこに行けば手に入るのかも判らなかった。俺は考えを巡らせる。とりあえずホームセンターに行けばなんとかなるだろう。店に着いた。今度はどの売り場を探せばいいのかが判らない。途方に暮れた俺は遂に店員に訊いた。「ボールのようなものをくれ」

遅刻

女という生き物はなぜ遅刻するのだろうか。腕時計を見る。待ち合わせの時間をすでに30分も過ぎている。いつもこうだ。何べん言っても直らない。もう我慢の限界だった。「お待たせ」肩を叩かれた。「ごめんね。待った?」「なあ、俺たちもう、結婚しようぜ」

缶詰

「今日はカリカリじゃなくて缶詰だ」蓋を開ける音に寝ていた猫の耳がピンと立つ。ボウルにえさを入れてやるともうまっしぐらだ。「今夜、隕石が落ちて世界が終わるんだってさ」猫はボウルから顔を上げ、きょとんとする。「最後のご飯だぞ」頭を撫でてやると猫は気持ちよさそうに目をつむった。

今日はどこに行くの？

答えは分かっている。ファミレスでごはんを食べてコンビニでお菓子や飲み物を買って帰って彼の部屋でゲームをしたり漫画を読んだりセックスしたり。それでも十分楽しかったけどたまには違うデートもしてみたかった。「今日はどこ行くの？」「天気もいいし、区役所にも行くか」

幼馴染

「鰯と鯖を下さい。あと鰯もお願い」ああ。また財布から千円札がひらひらと飛んで行く。「はいよ。重いから気をつけて」「ありがとう」動物園から逃げ出したシロクマをかくまっていた。南極生まれのペン太が彼は僕の幼馴染だと言い張るのを無視するわけにはいかなかった。たとえそれが嘘だとしても。

記憶

何を飲み何を食べたか。何処へ行き誰と会ったか。何から何まで記憶に残すようになった。お前はあの時こう言っただろう。記憶に残っているんだ。あなたはあの時あんな事をしたじゃない。記憶に残っているのよ。くだらない諍いばかりが増えた。馬鹿な話だろう？ 人は忘れるから良いのではないか。

星の欠片

高速のパーキングエリアに車を止め、次々と流れ落ちる星の欠片を眺めていた。違う。これも違う。巨大隕石は一向に姿を見せない。結局、世界は終わることなく朝が訪れる。ドリンクホルダーの缶コーヒーはすっかり冷たくなってしまった。俺の隣で犬は退屈そうに欠伸をする。さ。帰るか。